

8409 ある晩、ホテルの不寝番のおばさん・・・

ある晩、ホテルの不寝番のおばさんがいつになく元気で目をかがやかせ、

「ムッシュー・ネモト、残念ですが今晚でお別れですよ」

といいました。聞くと、

「明日からヴァカンスで一ヶ月、ブルターニュで孫と一緒に暮します」という返事でした。
どんな下積みの労働者でも、一ヶ月近いヴァカンスが、法律で権利としているフランスが、
日本といかに違う国であるか、を痛感させられました。

根本長兵衛『小さい目のフランス日記』

[許容訳例]

One evening, the night watchwoman of the hotel said to me, with unusual liveliness and bright eyes, "Mr. Nemoto—I'm sorry, but I say goodbye to you this evening." I asked why, and her answer was, "I'm going to spend my vacation, which begins tomorrow for a month, with my grandson in Bretagne." It brought home to me how different France is from Japan, in that France has a law which guarantees laborers in the lowest social stratum the right to (take) almost a month's vacation.

[翻訳例]

One evening, the night concierge of my hotel, a middle-aged woman, said to me with unusual liveliness, her eyes sparkling, "Mr. Nemoto—I'm afraid I shan't be seeing you again after this evening." When I asked why, she told me that her vacation began the next day and that she was going to Brittany to spend a month with her grandchildren. It brought home to me keenly the difference between Japan and France, where even the humblest laborer is entitled by law to nearly a month's vacation.

■ある晩、ホテルの不寝番のおばさんがいつになく元気で目をかがやかせ、「ムッシュー・ネモト、残念ですが今晚でお別れですよ」といました。(8409)

★「ある晩」は one evening でいいでしょう。one night でも構いませんが、これはからり遅い時間です。普通、寝るまでは evening です。

★「ホテルの不寝番のおばさん」は the night watchwoman of the[my] hotel でも通じます。話の舞台がフランスで、普通、「門番・管理人・接客係」をフランスでは concierge といいますから、the night concierge of my[the] hotel としてもいいでしょう。ただし、concierge を使うと、何らかの形で「おばさん」を表さなければなりません。すぐ後に「孫と一緒に・・・」とありますから、かなり年配でしょう。普通、middle-aged は五十代までを指し、その後は elderly ですが、国によっても違うでしょうし、一概には言えません。どちらを使ってもいいですが、the night concierge of my[the] hotel, a middle-aged woman と同格で示すしかな

いと思います。

★「いつになく」は unusual でいいでしょう。

★「元気」は liveliness でしょう。辞書では「元気」に vigor を当てていますが、これは何だか体質的な感じがします。

★「目をかがやかせ」は bright でもかまいませんが、 liveliness とは sparkling がよく合います。これは多くの場合、「何かいいこと、うれしいことがあって目が輝く」という感じで使います。

●文技巧

「いつになく元気で目をかがやかせ」は with unusual liveliness and bright eyes と書けますが、「目を輝かせて」には sparkling をよく使います。その場合は、with unusual liveliness, her eyes sparkling です。アメリカ英語では sparkling の代わりに shining も使います。She looked at me, her eyes sparkling [shining] with joy.（彼女は僕を見てうれしくて目を輝かした）

★「ムッシュー・ネモト」は、M. Nemoto ですが、英語に直して Mr. Nemoto でも構いません。

◆I'm sorry to…; I'm sorry, but…; I'm afraid…; I shan't be …ing など

「残念ですが今晚でお別れですよ」に I'm sorry to say good-bye to you…というと、相手もすでに別れることを了解している場合になってしまいます。つまり、新しい事実を相手に示す形にはならないのです。こういう場合は I'm sorry, but…か、 I'm afraid…を使います。たとえば、 I'm afraid I must say god-bye to you this evening.とか、 I'm afraid it's going to rain.のように。この場合の I'm afraid には「残念だが；言いたくないことだが」という意味が十分入っています。まあ、must の代わりに have to を使うと、外部的理屈（何か急に用事ができたとか、一時的に自分に関わりない事情があってとか）というニュアンスになります。ここでは使えません。ところで、私が中学で英語を習い始めた時、I shall go.と I will go.は区別して教えられました。今でもイギリスにはこの使い方が残っていて、これは非常に難しいと思いますが、このような場合に I shan't be seeing you again after this evening.という表現をよく使います。これは「今夜限りでお別れです」というような場合の一つの決まった言い方です。たとえば、I shan't be seeing you again for some time [any more in Japan].のように。なお、現在では shan't の代わりに won't も使われます。

★「…といいました」は said to me, “…”です。この文章には二つの直接話法がありますが、ここはそのまま直接話法にした方がいいと思います。後の直接話法は特別な内容ではなく、ごく当たり前のことを述べているのと「…という返事でした」となっていることから、直接話法にする積極的な理由はなく、間接話法にした方がいいように思います。

■聞くと、「明日からヴァカンスで一ヶ月、ブルターニュで孫と一緒に暮します」という返事でした。(8409)

★「聞くと」は「理由を聞くと」ということですから I asked why [the reason (why)]です。

●[と]（同時・順次）

「聞く[と]」の[と]は「同時」とも、あるいは使い方によっては「順次」になります。「同時」なら When I asked why です。「順次」なら I asked why and she answered…とか I asked why and her answer was…です。なお、直接話法なら When I asked why, she said, “…”ですし、間接話法なら When I asked why, she told me…あるいは Asking the reason [why], I was told that…です。

●文技巧「明日からヴァカンスで一ヶ月・・・」

この文は「明日から」があるので「ヴァカンスで」の[で]は単に「期間」(during)を表すのではなく「動詞の省略」(・・・して)として使われていることになります。つまり「明日からヴァカンスが始まって」です。ということは、後に続く「一ヶ月、ブルターニュで孫と一緒に暮らします」は、そのヴァカンスをどのように使うかを述べていることになりますから、My vacation begins tomorrow and I'm going to…to spend a month with…という重文になります。ということは、直接話法なら and ですむところを、間接話法では she told me that…and that…としなければならないということになります。それでも、ここはこの処理が一番自然な英語になります。

★「一ヶ月」は for a month ですが、これを使うと、他の表現との組み合わせがスムーズに行きません。たとえば、I'm going to spend my vacation, which begins tomorrow for a month, (staying) with…など、文法的には正しいのですが、流れの悪い英文になります。それを避けるために I'm going to spend my month's vacation, which…としても、ぎこちなさは変わりません。なお、vacation は which…以下で限定されているので a month's vacation と不定冠詞を使うことはできません。

★「孫と一緒に」は with grand children です。staying with…とする必要はありません。また、「孫」は一人ではないでしょう。

★「ブルターニュで」は in Bretagne でもいいですが、Britany という一般化した英語のスペルがありますから、これを使った方が英文としては自然だと思います。

★「・・・という返事でした」は、すでに上で示していますが、直接話法なら she said, “…”とか、her answer was, “…”です。間接話法なら she told me…あるいは I was told that…です。

■どんな下積みの労働者でも、一ヶ月近いヴァカンスが、法律で権利としているフランスが、日本といかに違う国であるか、を痛感させられました。(8409)

●原文について

この文の筆者は朝日新聞の記者でパリの支局長をした人なのですが、フランス語がよく出来る人（東大文学修士・早大大学院仏文博士課程）なのか、日本語がおぼつかないように感じられます。上の文は、「どんな下積みの労働者でも（→にも）、一ヶ月近いヴァカンスが（→を），法律で権利として（^与えて・保証して）いるフランスが、日本といかに違う国であるか、痛感させられました」と解釈して訳することにします。

★ 「どんな・・・でも」は even…です。

★ 「どんな下積みの労働者にも」は even laborers in the lowest social stratum ですが、全体を一つの一般的なユニットとして考えるべきで laborers は無冠詞複数とします。他には even the humblest laborer でもいいでしょう。この場合の humble は「社会的に目立たない」という意味です。

★ 「一ヶ月近いヴァカンス」は almost[nearly] a month's vacation です。

★ 「法律で権利として与えている」は laborer を主語にすると be entitled by law to…ですが、 law を主語にして a law guarantees even laborers in the lowest social stratum the right to (take)…とすることも可能です。

● 「文技巧」と「連体修飾節+特定体言」(・・・に・・・を法律で権利として(∧与えて・保証して)いるフランス)

「どんな下積みの労働者にも一ヶ月近いヴァカンスを法律で権利として(∧与えて・保証して)いるフランス」は「連体修飾節(どんな下積みの労働者にも一ヶ月近いヴァカンスを法律で権利として(∧与えて・保証して)いる)+特定体言(フランス)」ですから、英語では「特定名詞(France)+コンマ+関係詞節(, where….)」で処理します。そのためには、「(フランスが)日本といかに違う国であるか」を how different France is from Japan ではなく、 the difference between Japan and France と、先行詞 France が直前に来るようにして「コンマ+where…」と続けることの出来る構造にしなければなりません。ただ、 how different France is from Japan を生かしたければ、 …how different France is from Japan, in that France has a law which…とすればいいです。この場合 law は不定冠詞を付けます。定冠詞を付けると、すでに相手がどういう法律か知っているということになってしまいます。それから in that は「・・・という理由・点で；・・・だから」という意味です。 My new apartment is better than the old one in that it is closer to work./ Life in Tokyo is safer, but I like New York in that it's more stimulating. (マケーレブ・岩垣編著『英和イディオム完全対訳辞典』(朝日出版社))

★ 「痛感させられました」は It brought home to me keenly…が一番いいです。これは「(わかっているつもりのことでも)身をもって実感させられる」とか「(改めて)思い知らされる」ということです。主語を人にすると I feel keenly…も可能ですが、これは弱いです。